
鳥籠の王と楽園の小鳥

わだち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳥籠の王と楽園の小鳥

【Nコード】

N0451T

【作者名】

わだち

【あらすじ】

千年の栄華を誇るファイルーズ帝国。その輝かしき新政権のもと幽閉され続ける皇子は、幾千の夜に恋い願うように夢を見る。いつか自分の元へ訪れるだろう楽園の小鳥を。そして少女は、奴隷になった。奴隷から帝国初の皇妃になった少女と、孤独な皇帝の物語。

序章

“わたしの愛はわたしの上を、楽園の鳥のように飛翔する。
おまえの門に物乞いすることで、わたしは世に上なき身となっ
た”

壮

麗王スレイマン一世の詩より

小さな屍が十九。棺の数も十九。女を入れた麻袋は七つあった。
女たちはまだ生きていたので、処刑人たちはしつかりと袋の口を
荒縄で縛った。その荒縄に重石をつけるのも忘れない。処刑人たち
は一言も口を利かずに淡々と手慣れた作業を終えると、それぞれの
肩に一袋ずつ女を載せた。袋にくくりつけられた重石がぐ、と下が
り、歩きたびに処刑人たちの腰や太股の裏に当たる。それでも処刑
人たちは悪態を吐かない。顔をしかめもしない。女たちのくぐもつ
た悲痛な叫びも、哀願も、魂に直接血で刻みこむような呪いの言葉
さえ全く意に介さず、ただ黙々と歩いていく。海に向かつて。

夜明け前の海は暗く、静かだ。

岸壁に打ち寄せるさざ波が、ちやぶちやぶと血の滴りに似た音を
立てる。

処刑人たちは一人、また一人と黒々とした海面に担いできた女た
ちを投げ入れた。

女たちの断末魔は波に飲まれ、すぐに海底へと沈んでいく。海に

とつても、それは手慣れた作業だった。

千年栄える都の海には、千人の女たちが沈んでいると言われる。

女たちはみな一人残らず子を宿していたから、おそらくは千人の胎児もともに。

処刑人たちは女が海の底へ沈んだのを見届けると、今度は小さな屍を十九の棺に納めた。 恭しく。丁重に。棺にはファイルーズ帝国の紋章。高貴なる身に敬意を表して、子どもたちは上等な絹紐で絞め殺された。紐の両端には金の飾り房もついている。

みんな皇帝の血をその身に受け継ぐ子どもたちだ。

だから決して、その神々しい血を一滴たりとも流してはならない。その掟を破った処刑人は、たちどころに首を刎ねられた。

日が昇ると、長い葬儀の列が都の家々の間を通り抜ける。

十九個の棺は新皇帝に見守られる中、正装した帝国近衛兵たちによつて運ばれ、美しい寺院に埋葬される。響く甲いの鐘。低い祈りの歌。誰かのすすり泣く、かばそい声。

玉座についたばかりの若き皇帝は、最後の棺が埋葬されるのをじつと眺めた。

やがてすべてが滞りなく終わると、満足して宮廷への帰路に着く。

これで、と。

彼は至高の味に酔いしれる。

血を分けた異母兄弟たちはみな死んだ。

帝国の後継者は彼一人となり、暗殺や謀反の企てに怯える必要もない。

良心の呵責は感じなかった。長兄としての愛情も。なぜなら、彼の父親も、そのまた父親も、歴代の皇帝たちは即位後最初の仕事として、同じように兄弟たちを殺し続けてきたのだから。

『至高の権力の座についた暁には、国内の安寧、政情の安定を確保するために皇位継承権をもつ他の男児を、速やかに抹殺すべし』

ファイルルーズ帝国の輝かしき新政権は、いつも兄弟殺しから幕を開ける。

第一話

ファイルーズ帝国には皇帝直属の処刑人たちがいる。

彼らはみな耳が聞こえず、口も利くことができないという。

高貴な秘密を外部に漏らさぬよう、まだ幼いうちに両耳の鼓膜を破って蝋で固め、喉笛を切り裂いてしまうからだ。

漆黒の髪に夜と同じ黒い肌を持つ彼らは、その容貌ゆえに<黒鳥>と呼ばれる。死を運ぶ黒い鳥。鴉のように鳴き声で訪れを告げない分、よほど残酷で恐ろしい。

そしていつか。

<鳥籠>に閉じ込められた自分が、<鳥>と称される男たちに殺されるのだ。

笑えない皮肉だと、サフィールはいつも思う。

毎朝。

毎夜。

一日を生き延び、

一日、死が近づいたたびに。

二十年と、四か月と、五日。

二歳で幽閉されてから、もうそれだけ経つ。それとも、“たったそれだけだと言うべきか。”

彼の父であった皇子は処刑人たちに絞殺されるまで三十九年間<鳥籠>に閉じ込められていたというし、その前の前の皇子は五十年間。

五十年も幽閉された挙句、微塵も外の世界を知らずに殺される最期とはどんなものだろう。人は何を思うのだろう。“わたし”は、何を思うのだろう。空想することにも飽きてしまった。

きつと恨みはないだろう。憎しみも。悲しみも。もしかしたら、解放される奇妙な安堵さえあるかもしれない。来る日も来る日も決して開くことのない扉を見つめ、けれどもこの瞬間にもあの扉が開き、処刑人たちが絹紐をもってやってくるかもしれないと想像することはひどくつらい。

肉体と精神に長年に渡って重圧を加えられた者は、たいてい発狂する。

たとえそこが、贅を尽くした黄金の館だとしても。

(二十年と、四か月と、五日)

腹違いの兄の即位と同時に、サフィールはこの館に幽閉された。青と金のモザイクで飾り立てられた円柱を持つ、美麗な二階建ての館。けれどその周囲に二重に渡って張り巡らされた高い石壁のせいで、宮廷のどこからもその外観は望めない。一階には窓がなく、二階部分にある細長い窓も、すべて頑丈な鉄格子がついている。鉄格子の隙間から外を覗いたところで、見えるのは不気味な石壁ばかりだった。

サフィールは冷たい鉄格子をつ、と指で撫でた。

吐く息が白い。外から入り込む冬の冷気に、もうそんな季節なのだと思を吸う。今年は雪が降るだろうか。降ればいいのに。雪の断片は気まぐれだ。ひらりひらりと降ってきて、ときどきはこの格子を抜けて彼の手のひらに浅い水たまりをつくってくれる。これは昔からサフィールの気に入りの遊びだった。

背後に軽い衣擦れの音。

女たちの一人　この香りはきつとクーシャだ　が毛皮の裏打ちのついたマントを肩にかけてゆく。

サフィールは振り返らないまま、肩に乗せられた華奢な手が離れる前に、蝶を捕まえるように優しく掴む。女たちはみな優しい。だからサフィールも、女たちに優しくしてやりたいと思う。

サフィールの世話をするために、クーシャも、他の八人の女たち

も二十年間このく鳥籠>に幽閉されている。

一步も外に出ることを許されず、幽閉された皇子のためにその美しい身を与えて。

サフィールは十四歳になった頃、身体の目覚めとともに女たちを抱くことを覚えた。女たちは従順だった。やがてそのなめらかな白い肌に、九人とも同じ傷跡があるのに気づいたとき、そしてその指し示す事実によつやく思い当たったとき、女たちに性的慰めを求め、それをやめた。あまりに悲しかったから。

彼女たちは下腹部を切り開かれ、卵巣を切除されていた。サフィールの子を宿さぬように。

それを知った夜は、声を殺して泣いた。以来、己の不遇を哀れんで泣くことだけはしまいと誓った。

振り返り、ゆつくりと微笑む。

クーシャは控え目に微笑を返すだけで、何も言わない。声帯も奪われているから。

海峡を渡った北の地。遙か大陸の国から攫われてきた彼女の肌は白い。雪のような白さだ。どこもかしこも。彼女の姿も、心も、まなざしも透き通るように美しい。

サフィールは華奢な指先を持ち上げ、愛情をこめてキスをした。

「クーシャ」

白い手のひらをそのまま己の頬に当て、慣れ親しんだ柔らかさに息を吐く。

この手の温もりがあるから、気が狂わずにすんでいる。

絶望よりも、希望をもって未来を見据えることができる。

サフィールがく鳥籠>を出た先に待つ未来は二つ。高貴な屍となつて棺へ運ばれるか。新たな皇帝となつて至高の玉座へ運ばれるか。前者の場合は、女たちは海へ投げ捨てられる。

クーシャ、と彼は青い瞳を見た。

「この前、わたしが読んでみせた本の話を知っているか？ あれはよい物語だった。楽園の鳥の話だ。ずっとそれを考えている」

クーシャの手が頬を撫でる。一度、二度。

「楽園に住まう鳥は、青い羽根をもつという。そなたのような瞳の色に違いない。いつかわたしのもとへ舞い降りる鳥が、死を運ぶ黒い鳥ではなく、幸福を歌う青い鳥であればよいのに……」

そう願うのは女々しいことか。

クーシャが首を振る。横に。軽くこぶしを握った手でとん、とん、と励ますように肩を叩かれ、サフィールはにっこりした。

「わたしもそう思う。空想はわたしの得意なことでもあるしな」

言って甘い蜜を舌先で楽しむように、ゆっくりと瞳を閉じた。

たちどころに思いは遙か幸福の園へと飛んでいく。そこでわたしは空の青さを知るだろう。楽園の鳥と共にとこしえの春を歌うだろう。

「わたしはそれを夢に見よう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0451t/>

鳥籠の王と楽園の小鳥

2011年5月14日12時55分発行